

気の音楽療法

- 『莊子』から読み解く一人称の実践 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
荒川 有加

この論文は、東洋哲学の古典である『莊子』との対話によって、自らの音楽療法実践の真実が何であったのかを明らかにしていく試みを記したひとつの質的研究である。また、自らの実践を「気の音楽療法」と名づけるに至った道程を記したものである。

わが国の音楽療法についての研究は、数量的、実証主義的な研究傾向が称揚される傾向、欧米に比べ本質主義的な研究や理論的研究・学際的研究（とくに人文科学との議論）が極端に少ない傾向があると指摘されているが（阪上 2008）、筆者は、認知症の後に昏睡状態になったクライアントとの音楽療法、彼が死後四十九日の間に行った音楽療法の事例を持ち、これらは、数量的、実証主義的、科学的、客観的視点では読み解くことができないものであった。

筆者は、レイキという気を用いた癒しの技に出会う。そして、レイキの実践を通して、先程の音楽療法事例と、長年演奏者として感じてきたことが、「響き」という名の「気」という実感をもって、自分の中に統合されていった。この「統合された体験」を読み解くことを可能にした思想哲学が『莊子』であった。『莊子』の思想は、中国のみならず、古くからわが国の文化や思想に多大な影響を与えてきた。特に禅に与えた影響は大きく、トランスパーソナル心理学にも『莊子』の哲学が深く流れている。筆者は『莊子』を、自らの統合された体験に即して解釈することを試み、昏睡状態のクライアント、死後のクライアントと行った音楽療法が、いったい何であったのか、その真実を究めようと、読み解いていった。その結果、筆者は自らの音楽療法を、「気」の次元の実践であると確信するに至った。

執筆に当たって、筆者は自分を「私」という一人称で表現することにした。自らの体験の真実が何であるのか、といった問いを解くためには、主観的な視点を大切にすることが必要であると考えたからである。よってこの論文は、「私にとっての真実」を記したものである。しかし、このように自分の視点と体験を究めようとする姿勢が、そして「気」とい

う、超越的な、トランスパーソナルな次元を価値あるものとして示すことが、わが国に新しい価値観を持つ音楽療法を広めるきっかけになりえるのではないかと考えている。そして、思想・哲学と「統合された複数の体験」を、自分の中でひとつにすることが、新しい次元の価値観を開くと考えている。